

## 2024 年度 国際留学生入学試験 2 次選考 日本語試験問題

- (1) 以下の文章を読み、その内容を要約しなさい。(100 字以内)
- (2) 以下の内容を踏まえ、自分の意見を述べなさい。(200 字以内)

9 日にノーベル経済学賞の受賞が決まった米ハーバード大学のクラウディア・ゴールディン教授は、男女間に賃金格差が生じる要因を解明した研究が評価された。同日の記者会見では日本の女性の雇用について「労働時間が短い」など注文をつけており、企業や政府にとっても示唆は大きい。

「日本は驚くべきことをやってのけたが、女性を労働力にするだけでは十分ではない」。ゴールディン氏はハーバード大での会見で、日本での女性の労働参加について評価と注文を織り交ぜた。

経済協力開発機構 (OECD) によると、日本の女性 (25~54 歳) の労働参加率は 2021 年に 81% と 10 年比で 9 ポイント上昇し、米国の 75% を上回った。人手不足を受け企業が女性雇用を進めたことなどの結果だが、ゴールディン氏は女性が仕事を得るだけでは賃金格差は縮まらないと指摘する。

背景には日本の女性雇用がパートタイムに偏る現実がある。パートなど非正規雇用で働く女性の比率は 21 年に 54% と男性の 22% を大きく上回る。女性雇用が短時間労働に集中する背景について、ゴールディン氏は様々な角度から分析してきた。

有名なのは、男女間の賃金格差の要因に「労働時間の柔軟性」を挙げた 14 年の論文だ。子どもを産んだ女性の昇進が遅れたり、短時間労働に押し出されたりしてしまう現象は「チャイルドペナルティー」として知られる。

一般には育児負担が女性に偏りがちなことがこの現象の要因と考えられるが、ゴールディン氏は長時間労働や突発的な業務など仕事の質にも問題があるととらえた。

そこで注目したのが弁護士と薬剤師の仕事の差だ。若手の弁護士は顧客対応などで長時間労働を迫られるため、育児を抱える女性に不利となり、結果的に賃金格差は大きくなる。一方、業務時間が定められ交代もしやすい薬剤師の仕事では格差は米国で小さかった。

ゴールディン氏は男女を問わず勤務時間の調整がしやすい「フレキシビリティ (柔軟性)」こそ賃金格差を埋める最後のカギだと説いた。明治学院大学の児玉直美教授は「格差の問題では政府の介入などを求める主張が多い中、労働市場の中に解決のヒントを求めた功績は大きい」と話す。

さらに女性の仕事がパートなどに偏りがちなことに関しては、「期待」の役割を重視する。母親に育児が偏る社会で育った女性は、将来の教育や職業選択について子どもの頃のイメージや期待にとらわれがちだ。男性の育児参加などで期待のバイアス (ゆがみ) を変える意義は大きいと説く。

ゴールディン氏は近著「なぜ男女の賃金に格差があるのか」の中で「単純な解決策も万能な政策もない。しかし、問題を知ることによって、私たちは正しい方向に進むことができる」と説いた。様々な要因で生じる不平等を是正するため、研究を振り返る意義は大きい。

出典：「日本女性の労働参加増「驚き」 ノーベル経済学賞のゴールディン氏 勤務時間の短さには注文  
男女賃金格差の是正に示唆」 『日本経済新聞』2023 年 10 月 11 日 朝刊